

# 研究紀要

## 第35号

—設立40周年記念号—

### 研究紀要

#### 第35号

—設立40周年記念号—

公益財団法人

埼玉県埋蔵文化財調査事業団

- |   |                         |
|---|-------------------------|
| 上川名式と花積下層式の交流<br>—縄文時代前期初頭における文様描出方法の統一化について— | 鈴木 宏和                   |
| 中矢下遺跡A区出土石楯の再検討<br>—縄文時代前期後半の石楯との比較—          | 水村 雄功                   |
| 縄文石器を対象とした型式設定における一試論<br>—縄文時代前期の押出型石匙を対象に—   | 入江 直毅                   |
| 特殊器台弧帯文の施文方法                                  | 小林 萌絵                   |
| 方形周溝墓の研究とキョウダイ原理をめぐって                         | 福田 聖                    |
| 埼玉県新井堀の内遺跡における埋蔵銭                             | 上野貞由美                   |
| 近世町屋における鍛冶関連遺物の廃棄状況について                       | 高橋 杜人                   |
| 栗橋宿跡出土のヨーロッパ産陶磁器について                          | 水村 雄功                   |
| 近世遺跡出土針葉樹材の簡便な保存処理方法について                      | 井上 真帆<br>野中 仁           |
| 古代から教室へのメッセージ事業について                           | 藤田 栄二<br>田中 広明<br>堀内 紀明 |

2021

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



写真1 ベルギー ボッホ・フレール社



写真2 イングランド ドーソン社



写真3 スコットランド  
ジョン&マシュー・パーストン・ベル社



写真4 イングランド ジョンソン・ブラザーズ社

(水村 栗植宿跡出土のヨーロッパ産陶磁器について)

# 目次

巻頭図版

序

上川名式と花積下層式の交流 —縄文時代前期初頭における文様描出方法の統一化について—	鈴木 宏和 (1)
中矢下遺跡A区出土石槍の再検討 —縄文時代前期後半の石槍との比較—	水村 雄功 (21)
縄文石器を対象とした型式設定における一試論 —縄文時代前期の押出型石匙を対象に—	入江 直毅 (35)
特殊器台弧帯文の施文方法	小林 萌絵 (55)
方形周溝墓の研究とキョウダイ原理をめぐって	福田 聖 (65)
埼玉県新井堀の内遺跡における埋蔵銭	上野真由美 (91)
近世町屋における鍛冶関連遺物の廃棄状況について	高橋 杜人 (107)
栗橋宿跡出土のヨーロッパ産陶磁器について	水村 雄功 (123)
近世遺跡出土針葉樹材の簡便な保存処理方法について	井上 真帆 野中 仁 (147)
古代から教室へのメッセージ事業について	藤田 栄二 田中 広明 堀内 紀明 (157)

# 栗橋宿跡出土のヨーロッパ産陶磁器について

水村 雄功

**要旨** 栗橋宿跡は、17世紀前葉に開かれた日光道中7番目の宿場町である。栗橋宿跡の調査で検出された陶磁器は、国産陶磁器が大多数を占める中、時折、舶載陶磁器がみられ、地方宿場町における貿易陶磁器流通の一端を垣間見ることができる。特に、幕末から明治時代にかけての遺構にはヨーロッパ産陶磁器が散見され、安政5年(1858)に締結された「安政五ヶ国修好通商条約」による日本の貿易情勢変化が如実に表れている。

栗橋宿跡ではヨーロッパ産陶磁器がみられるものの、生産地不明の製品が多かった。しかし、陶磁器の裏印を調査した結果、ベルギーのボッホ・フレール社、イングランドのドーソン社、スコットランドのベル社の3社の製品が地方宿場町にも流通していることが明らかになった。また、栗橋宿跡のヨーロッパ産陶磁器を集成した結果、1860年代から1890年代頃の遺構にみられた。横浜港の開港によってヨーロッパ産陶磁器の流通が活性化し、江戸市中と同様に中流以下の経済階層の外国趣味需要が高まったことが示唆された。

## はじめに

栗橋宿跡は、久喜市栗橋町に所在する日光道中7番目の宿場町である。栗橋宿跡では、国産陶磁器が大多数を占める中、出土量は少ないが、舶載陶磁器が散見される。出土する舶載陶磁器は、中国産とヨーロッパ産の大きく2地域である。

ヨーロッパ産陶磁器は長崎市の出島阿蘭陀商館跡や江戸市中でも多く確認されているが、地方宿場町での出土例は少ない。

本稿では、調査によって新たに明らかにされた3社のヨーロッパ産陶磁器とヨーロッパの影響を受けた国産製品の報告を行う。更に、現在明らかになっている栗橋宿跡出土ヨーロッパ産陶磁器の集成を行い、その年代と当時の貿易情勢を含めた考察を行っていく。

## 1 栗橋宿跡の発掘調査概要

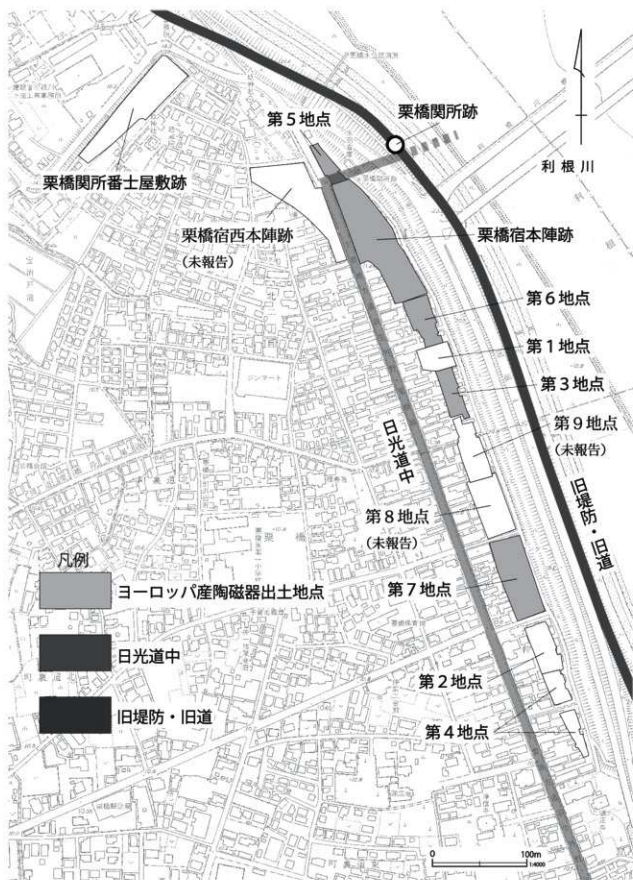
栗橋宿は、茨城県五霞町に所在した元栗橋より、利根川改修の際に移ってきた人々によって開

墾された日光道中の宿場町である。栗橋宿の成立時期は諸説あるが、『新編武蔵風土記稿』では慶長年間(蘆田1963)、明治45年(1912)に刊行された『栗橋町郷土誌』では慶長19年(1614)とされている(久喜市2013)。また、『栗橋町史』では元和7年(1621)前後の開墾と推定している(久喜市2015)。

寛永元年(1624)には栗橋開所が開墾されていることから、少なくとも1620年代には開墾されていたと思われる。

日光道中は、江戸日本橋を起点とし、下野国坊中までの20宿、36里11町の街道である。埼玉県内では、草加・越ヶ谷・粕壁・杉戸・幸手・栗橋宿があり、栗橋宿の対岸には中田・古河宿がある。さらに北上すると、野木・間々田・小山・新田・小金井・石橋・雀宮・宇都宮・徳次郎・大沢・今市・鉢石宿を経て、日光坊中へ至る。

栗橋宿は江戸から7番目の宿場町で、利根川対岸の中田宿と合宿である。『栗橋町史』に所収さ



第1図 栗橋宿跡地点配置図 (水村 2019 改変)

れた『日光道中宿村大概帳』によると、宿の家数404軒、本陣・脇本陣各1軒、旅籠屋25軒、人口1741人と記されている。宿の規模は小さいが、旅籠屋や茶屋が多い特徴がある。

栗橋宿跡は、平成24年度から首都圏氾濫区域堤防強化対策事業に伴って発掘調査が行われている。令和2年度(2020)現在、町屋跡(9箇所)、本陣跡(1箇所)、脇本陣跡(1箇所)、関所番士の屋敷跡(1箇所)、陣屋跡(1箇所)の13箇所の調査が行われ、8冊の報告書が刊行されている(註1)。

調査総面積は32,000㎡以上を測り、町屋の裏手にあたる部分およそ800㎡に渡り調査されている。その結果、19世紀以降とされる第一面では、現在の家屋に沿う形で土蔵跡と推定される建物跡や敷地境の溝跡・杭列等が整然と検出された。これらの区画は、久喜市所蔵の成立年代不詳の『栗橋宿往還絵図』(以下、『絵図』)や明治35年(1902)に刊行された『埼玉県営業便覧』(以下、『営業便覧』)を利用し、区画の検証が報告書で行われている。

発掘調査では本陣跡、第6地点といった栗橋宿上町にあたるエリアにおいて、17世紀中葉に比定される開宿期の遺構が僅かながらもみられる。しかし、17世紀後葉、18世紀前葉に比定される遺構は栗橋宿跡の報告書が半数刊行された現在においてもほぼ皆無であり、町屋形成の空白期間の問題が残されている。

18世紀中葉になると遺構が増え始め、18世紀後葉に遺構数が爆発的に増える。この時期になると、中国大陸からの輸入陶磁器が極僅かにみられるようになり、19世紀に入るとその数は若干の増加がみえる。また、19世紀後半に差し掛かるとそれまで中国産のみであった舶載陶磁器にヨーロッパ産のプリントウェア(註2)等が加わるようになる。

## 2 栗橋宿跡出土のヨーロッパ産陶磁器

栗橋宿跡では、舶載陶磁器を江戸との出土傾向の比較ができるように、可能な限り抽出し、細片を含めて全点掲載を行っている。その中で、ヨーロッパ産の陶磁器が15点確認されている。その大半は、18世紀からヨーロッパ各国で量産されている銅版転写絵付け(註3)の所謂プリントウェアである。

いずれも報告書では生産地の特定に至っておらず、後述する第6地点出土の皿のみがオランダ産のデルフト焼の可能性のある製品として報告されている。

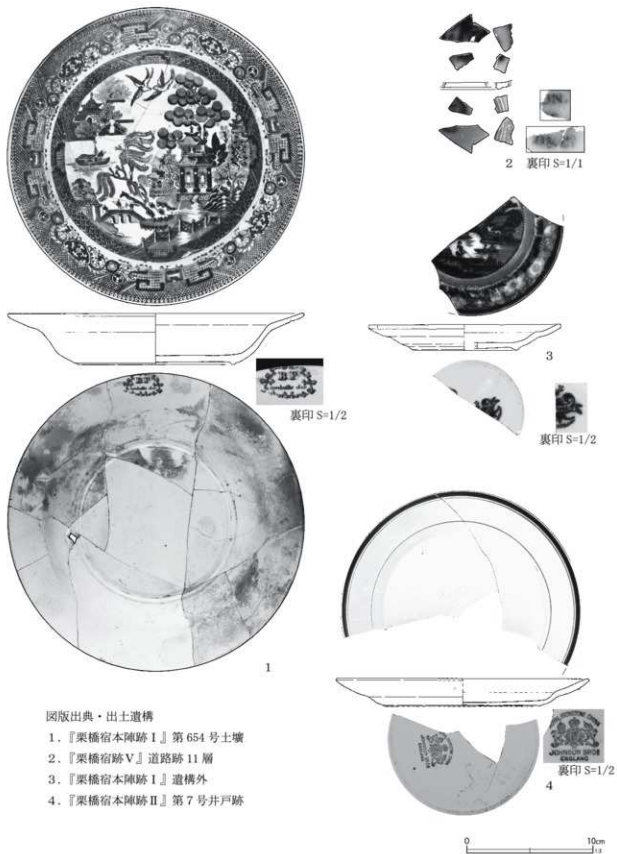
筆者は、裏印が確認されているものについて調査を行い、その結果3カ国3社の製品を新たに確認することができた。以下に、栗橋宿跡で確認されているヨーロッパ産陶磁器についてみていく。

出土遺構の推定廃絶年代については、第1表に報告書未掲載品を含んだ陶磁器類の組成表を示し、可能な限り年代を絞った。なお、年代については、詳細な年代を示す上で有効な手段である東京大学構内遺跡群の分類(東京大学埋蔵文化財調査室1999・2011)、いわゆる東大分類を用いて年代の絞り込みを行った。また、年代は廃絶時期を示しているため、希少性の高い陶磁器については若干の伝世期間を考えなければならないことを留意しておきたい。

### (1) 裏印が認められる製品

第2図の1はベルギー南部のラ・ルヴィエール(La Louviere)に所在するポッホ・フレール社(Boch Flere)で製作されたタリム皿である。ポッホ・フレール社は、現在では名門陶磁器メーカーのロイヤルポッホ(Royal Boch)として知られている。

銅版転写染付で、ブルー&ホワイトのプリントウェアであり、内面にはウィロウ・パターン(Willow Pattern)を転写してある。罎部外面には窯道具痕と裏印がみられる。窯道具痕は3カ所に各1点ずつみられる。プリントウェアの最良製品



図版出典・出土遺構

1. 『栗橋宿本陣跡Ⅰ』第654号土壇
2. 『栗橋宿跡Ⅴ』道路跡11層
3. 『栗橋宿本陣跡Ⅰ』遺構外
4. 『栗橋宿本陣跡Ⅱ』第7号井戸跡

第2図 栗橋宿跡出土ヨーロッパ産陶磁器(1)

は、thimbles（はめ輪）と呼ばれる窯道具に設置され、鈔裏面に3点の単一痕跡を残すという（岡2018 註4）。これは、その痕跡と考えられる。

また、ヨーロッパ製陶磁器の皿には、内面にナイフやフォークの使用痕（カトラリー痕跡）が観察されるケースがあるが本製品には認められなかった。

裏印の「B.F.」は「Boch.Flere.」のイニシャルである（註5）。社名の下部にはパターン名を示す傾向にあるが「WILLOW」ではなく、フランス語で「medaille dor」と読める。意味は「金賞」である。

先述の窯道具痕も踏まえると、本製品は最良品といえる。裏印の形態から1855～1860年に製作されたものと考えられる。

阿蘭陀商館があった長崎市の出島では、1850年代後半からオランダ・マーストリヒト（Maastricht）のペトルス・レゲー社（Petrus Regout）製品が多量に荷揚げされている。レゲー社傘下企業であったボッホ・フレール社の製品も1860年代後半に輸入されている（岡2008）。

関東地方の類例は、東京都港区に所在する上行寺跡・上行寺門前町屋跡遺跡（港区2006）に同様の製品がみられる（第4図1）。裏印の図像は栗橋宿跡出土の製品と一致するが、上行寺跡出土の製品はパターン名の箇所「WILLOW」の文字がみえ、栗橋宿跡出土のものとは異なっている。

出土位置は、栗橋宿本陣跡の町屋区画で検出された区画Gの第654号土壌である。報告書内で区画対比に用いた「絵図」にみえる「旅籠屋 友八」地内に相当する。

共存する陶磁器は、瀬戸美濃系磁器の湯呑形碗を主体に、卵殻手環、篆刻文「木」の小形端反形碗を組成する。また、大皿類が多く、旅籠屋に関わる資料と考えられる。出土遺物のほとんどが被熱しており、火災に関わる一括廃棄と考えられる。廃絶時期は1860年代から1870年代頃である。

2はイングランド北東部の港湾都市、サンダーランド（Sunderland）に所在したドーソン社（Dawson&Co）で製作された皿である。

複数の小破片のみ遺存している。裏印は分散し、サークル状のマーク内に「□□□□ ON.」、別破片に「D&Co」がみえる。「Co」は「Company」を意味し、「D」は「Dawson」のイニシャルを示すと考えられる。「□□□□ ON.」は「DAWSON」の末尾文字「ON.」であろうか。小破片のためパターン名は不明だが、酸化コバルトが透明釉に流れ込み滲む、いわゆるフロウ・ブルー（Flow Blue）の製品である。

ドーソン社は、1799年から1867年に操業していた窯である。スタッフォードシャー（Staffordshire）諸窯の製品より質が劣るものの、19世紀中葉頃にペトルス・レゲー社製品と共に長崎市の出島で多量に荷揚げされ、阿蘭陀商館跡では多く出土している。

出土位置は、栗橋宿本陣跡の北に隣接し、関所へ向かう日光道中に比定される道路跡第11層である。第11層からは、小破片だが酸化コバルト染付の平碗1点を最新とする19世紀第3四半期～第4四半期頃にかけての遺物が出土している。

日光道中の露盤は出土遺物から明確な時期区分が可能であり、上層の第10層は銅版転写染付磁器坏を含み、単色釉の磁器碗を最新とする19世紀末～20世紀前葉、下層の第12層は青緑釉土瓶を最新期の陶磁器とする19世紀中葉に機能していた路盤である。

これらのことから、ヨーロッパ産陶磁器が出土している第11層の露盤は幕末から明治前半頃に機能していたことがいえる。

検出された日光道中の両脇には、「百姓/十兵衛」、「飯売旅籠屋/初五郎」、「茶屋/平兵衛店」、「飯売旅籠屋/庄右衛門」が連なり、飲食に関わる店が多い。

3はスコットランド南部のグラスゴー



(Glasgow) に所在したジョン・マッシュ・パーストン・ベル社 (J&M.P.Bell&Co) で製作された皿である。ベル社は、1841年に設立され、1912年頃まで稼働している。

銅版転写染付によりフロウ・ブルーのワイルド・ローズ・パターン (Wild Rose Pattern) が絵付けられている。滲みは弱く、パターンが明瞭にみえる。裏印はパターン名の「[WILD] ROSE」、社名「[J&]M.P.B.&Co」が遺存している。

なお、ベル社は1870年にマッシュ、1880年にジョンが没すると、1881年にジョン・マードックが引き継ぎ、J&M.P.B.&Co.Ltd に社名を変えている。

出土位置は押さえられておらず、栗橋宿本陣跡の第一面表採資料である。ワイルド・ローズ・パターンは、1830～1850年代に流行したパターンであり、日本国内に流通するものではベトルス・レゲー社、ドーソン社の代表的なパターンである。長崎市の出島阿蘭陀商館を経由して多量に流通している。

ケリー (Kelly) がまとめたベル社で1840～1850年代に使用されたパターンには、ワイルド・ローズがみえない。裏印の形態から考えると、1860～1880年に製作されたものであろうか。いずれにせよ、本製品は19世紀中頃に降にもたらされたものと考えられる。

4 はイングランド中部のスタッフォードシャー・ストーク・オン・トレント (Staffordshire Stoke on Trent) に所在するジョンソン・ブラザーズ社 (Johnson Bros) で製作されたブルーラインのリム皿である。

口縁は折鈎で、鈎部外面に窯道具痕がみられる。内面には青の圈線が巡る。

裏印上部には「ROYAL IRONSTONE CHINA」、下部には「JOHNSON BROS/ENGLAND」の銘が確認できる。「IRONSTONE CHINA」は素地の名称で、硬質陶器を示す。図像はクラウンに獅子・

ユニコーンをあしらった英国王室紋章のデザインである。

ジョンソン・ブラザーズは1883年に創業されており、裏印のデザインは1883～1913年に使用されていたものである。

関東地方の類例では、横浜市の州千島遺跡内にある1894年 (明治27年) に設立された銀行集会所跡から複数枚出土している (横浜市歴史博物館2020)。

出土遺構は、本陣跡敷地の南西側にある第7号井戸跡で本陣の店子に位置し、『絵図』では区画②「髪結/七兵衛」、『営業便覧』では「運見豊三郎」に相当する。

井戸枳内から出土しており、複数の瀬戸美濃系酸化コバルト染付磁器の小坏が共存して出土している。最新期の陶磁器は磁器製ティーカップであり、19世紀末頃に廃絶したと考えられる。ジョンソン・ブラザーズ社の創業年との整合性はとれている。

第3図1はオランダで製作されたデルフト焼の可能性のある皿である。

下地に白土化粧が施され、その上に淡い色調の藍絵で草花文が絵付けられ、施軸されている。窯道具痕は観察されなかった。このことがデルフト焼の判断を困難にさせている。破片3点が出土しており、同一個体と考えられる。平面の器形は長円形の大皿と推定される。

焼継痕がみられることから良質なものとして長期間伝世していたと考えられる。また、被熱しており、共存遺物に被熱痕跡がみられないことから過去に焼けた出された後にも大切に扱われていたことが示唆される。

栗橋宿跡で確認されている火災痕跡は、最新期では第7地点の1870年代頃の火災処理土壌である。次いで、本陣跡 (町屋) の1860年代から1870年代、本陣跡の文政5年 (1822) の火災処理土壌である。

第6地点では明確な火災処理土壌は検出されておらず、被熱遺物のまとまった出土は3時期の遺物が混在している第138号土壌で確認されている。被熱資料については、報告書では第1期(栗橋6期)の遺物群として捉えており、19世紀前葉に比定される。

少なくとも19世紀前葉には伝来しているのであろうか。

出土位置は、第6地点第6号溝跡で、重複する第5号溝跡より古い。第5・6号溝跡はいずれも両溝跡の遺物が混在していると考えられるが、下層遺構の巻き上げを考慮し、帰属遺構がはっきりしないものについては原則下層遺構の遺物として取り上げられている。

上層の第5号溝跡の最新期陶磁器は、瀬戸美濃系磁器の銅版転写染付平碗、酸化クロム青磁釉に外面篋文の丸腰湯呑である。いずれも日野市南広間地遺跡の「近・現代磁器碗の器形とその変遷」(日野市遺跡調査会2003)では、20世紀第1四半期に位置付けられている。

ヨーロッパ産陶磁器が出土した第6号溝跡の最新期陶磁器は、瀬戸美濃系磁器の酸化コバルト染付端反形環及び急須である。長筒形湯呑碗は、20世紀第1四半期の製品だが、第5号溝跡からの混入と考えられる。また、明治16年(1883)銘の硯が出土している。

以上を踏まえると、陶磁器の様相は型紙摺染付磁器が普及する直前段階の1870～1880年代を示すが、廃絶年は硯の年号から1883年が上限と考えられる。

第6号溝跡は『絵図』では「舟間屋/平兵衛」と「餅菓子屋/彌吉」、「営業便覧」では「栗橋學校」と「菓子商/住吉屋/鳥海彌市」の敷地を区画する溝跡である。

## (2) 生産地不明製品

プリントウェアは、人気のある主要なパターンを他社から銅版を購入したり、改作を行う事例が

ある。そのため、製造会社を示す裏印が記されていないければ、プリントのデザインから製造会社の特定を行うことはほぼ不可能である。

第3図2～11は、裏印が元々みられない、もしくは欠失により確認できなかったため製産地が不明の製品である。伝世例や阿蘭陀商館、江戸市中、山下居留地等の出土例から、いずれもオランダ、ベルギー、イギリスの各国諸窯で作られたものと推定される。

2は、銅版転写染付のウィリアム・テル・パターン(Willam Tell Pattern)の碗である。口径は10cmである。やや直線的に開く器形である。類例は少なく、長崎市の出島阿蘭陀商館跡で攪乱から同様の口縁部小破片が出土しており、1860年頃のオランダ・マーストリヒトのペトルス・レゲ社製として報告されている(岡2002)。

また、岡泰正氏はペトルス・レゲ社の使用パターンとその年代についてまとめており、ウィリアム・テルは1853年としている(註5)。

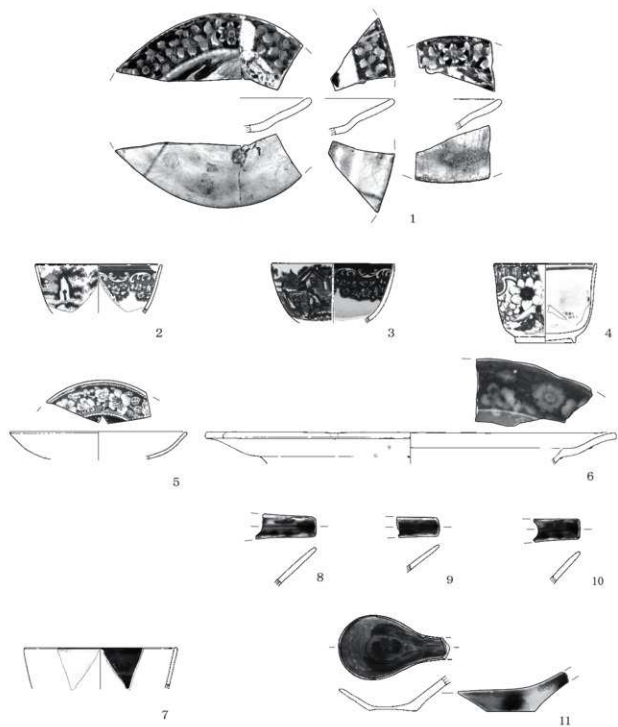
出土遺構は、本陣跡(町屋)区画Cの第445号土壌で、『絵図』では「荒物屋利兵衛」にあたる。

第445号土壌は、遺構区画や出土陶磁器類の混在状況から2基の土壌の重複の可能性がある、報告書では第445号土壌a・bに分けられている。第445号土壌aは、瀬戸美濃系磁器湯呑形碗を最新とする第466号土壌より古く、19世紀中葉以前と推定される。

一方、第445号土壌bについては、他遺構との重複がみられない上、aとの新旧関係も不明であることから正確な年代を特定することは難しい。

出土遺物は第445号土壌として一括して報告している。最新期の陶磁器類は、多色刷り銅版を含む銅版転写染付磁器と代用陶器である土器釜であり、これらの年代は大正年間～昭和初期頃と考えられる。

また、陶磁器類は19世紀前葉～中葉に比定さ



図版出典・出土遺構

1. 『栗橋宿跡Ⅲ』第6号溝跡 2. 『栗橋宿本陣跡Ⅰ』第445号土壇 3. 『栗橋宿本陣跡Ⅰ』第一面遺構外 (D648)  
 4. 『栗橋宿跡Ⅳ』第4号土壇 5. 『栗橋宿跡Ⅰ』第3地点第4号土壇 6. 『栗橋宿跡Ⅰ』第3地点第8号土壇  
 7. 『栗橋宿跡Ⅳ』第35・36号土壇 8～11. 『栗橋宿跡Ⅳ』第6号土壇

第3図 栗橋宿跡出土ヨーロッパ産陶磁器 (2)

れる瀬戸美濃系磁器の端反碗・湯呑碗・卵殻手環を主体とする。しかし、酸化コバルト染付、型紙摺絵染付、銅版転写染付が一定量認められるため、2基の遺構の年代を明確に分離することは極めて難しい。

3は、銅版転写染付で、口径9.8cmを測る。2とほぼ同形・同法量の碗である。2と比較すると立ち上がりの丸みが強い。パターン名の特定には至らなかったが、外面に子供を連れた女性と座る男性、奥には煙突がみえる住居のような建物が描かれている。子供と女性の背景には建物から延びる橋と思われる構築物が描かれている。内面の草花文は2と非常によく似ている。

出土位置は本陣跡（町屋）の区画E・FにあたるD6-A8グリッドである。区画E・Fを分ける第601号杭列周辺にあたる。

区画については、遺構上は明治前半頃まで機能していた第601号杭列の存在から2区画に分けられる。しかし、『絵図』との対比では敷地の前後関係を考慮しても2区画とすることは困難であった。そのため、2区画合わせて「饅飴屋/音吉」として区画対応させている（村山2019）。

区画Fの1860～1870年代頃と推定される第605号土壌では、爛徳利や磁器杯の組物が出土しており、飲食に関わる陶磁器の様相を示している。区画との関係性が示唆される。

4は、口径8.0cmを測る銅版転写染付の湯呑形碗である。外面に草花文が描かれ、内面口縁部に圈線が廻る。下層の第6号土壌と接合しており、下層遺構の巻き上げの可能性がある。パターン名は不明である。器形は湯呑形だが、やや外反する。ヨーロッパでは馴染みのない器種であり、日本をはじめとするアジア市場向けに製作されたものであろう。

出土遺構は第7地点の第4号土壌で、第6・19号土壌と重複がみられる。第4号土壌が最も新しい。なお、下層の第19号土壌は、木型打ち

込み成形そり皿を最新とするが、小型湯呑形碗や卵殻手環等の幕末期に比定される陶磁器が主体である。

一方で第4号土壌は銅版転写・型紙摺絵・酸化コバルト染付磁器がみられる。遺構は一部攪乱を受けており、いずれも小破片であることから混入と考えられる。最新期の陶磁器は、瀬戸美濃系磁器の木型打ち込み成形そり皿と杯である。いずれも江戸時代末年から明治初頭頃の指標遺物である。

以上のことから、第4号土壌の廃絶年代は1870年代頃と推定される。出土区画は、『絵図』では「髪結/庄助店/嘉吉」、「営業便覧」では「金床」である。

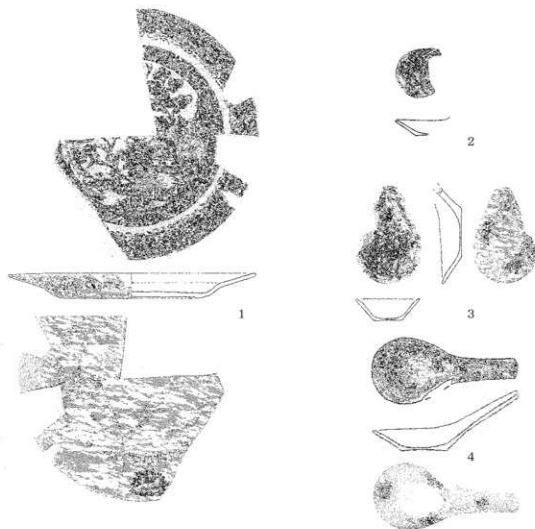
5は、ブルー&ホワイトで、銅版転写染付のワイルド・ローズ・パターンの皿である。口径は13.9cmを測る。

出土遺構は、第3地点区画Sの第4号土壌である。『絵図』では「旅籠屋/勘兵衛」、「営業便覧」では「豆腐屋/沼田金次郎」にあたる。

出土陶磁器は、クロム釉青磁の外面鎔文丸腰湯呑を最新とし、銅版転写・型紙摺絵・酸化コバルト染付磁器が網羅的に認められる。また、型紙摺絵染付磁器が全体的に多い。19世紀末頃と推定される。

6は、銅版転写染付のワイルド・ローズ・パターンの皿である。口径32.2cmを測る大皿であり、折鐔で輪花状の口縁である。ドーソン社製とされる同製品の口縁部破片が出島阿蘭陀商館跡から出土している（岡2008）。

鐔の表面には窯道具痕（ハリ支え跡）が1箇所、裏面には3箇所が三角形に配置されている。この窯道具痕は、表面を下向きに水平にして置き、下にある皿の裏面に置いたコックスパー（cockspurs）を挟んで焼く最も一般的な窯詰方法（岡2008）の痕跡である。鐔裏面の3点の窯道具痕から3ピンコックスパーと考えられる。



図版出典・出土遺構

1. 『上行寺跡・上行寺門前町屋跡遺跡』第521号遺構 2. 『山中城跡三ノ丸第1地点』第1号井戸跡  
 3. 『上行寺跡・上行寺門前町屋跡遺跡』第250号遺構 4. 『取手宿跡』第16号土壌



第4図 関東近隣の類例

出土遺構は、第3地点区画R2の第8号土壌である。『絵図』では「名主・間屋 / 傳五右衛門」、『営業便覧』では「菓子商 / 田畑金一郎」である。区画内での位置は、区画Sの「旅籠屋 / 勘兵衛」・「豆腐屋 / 沼田金次郎」に近い。

共存する陶磁器は、揃いの碗が多く、型紙摺絵染付磁器丸碗6個体以上、同平碗4個体以上の破片が最新であり、1880年代頃と考えられる。

7は、銅版転写染付でフロウ・ブルーの鉢と思

われる破片である。内面に模様らしきものがうつすらみえるが判然としない。やや反り気味に開く器形である。

出土遺構は第7地点の第35・36号土壌である。『絵図』では「小売酒屋 / 清次郎」にあたる。本遺構は被熱遺物を多量に包含し、1870年代におきたと推定される火災に関わる廃棄土壌である。

瀬戸美濃系磁器の木型打ち込み成形そり皿や三田系青磁鉢などの最新期陶磁器が焼けており、酸

化コバルト染付磁器が普及する直前段階の一括遺物である。なお、ヨーロッパ産陶磁器には被熱はみられなかった。

8～11は第7地点の区画第6号土壌から出土した散蓮華である。銅版転写染付のフロウ・ブルーで、文様はかなり糊に流れてしまっている。3個体ないし、4個体のセットで購入したものと思われる。

パターン名は不明だが、草花文が内外面に転写されている。関東地方とその周辺で管見の限りであるが、三島市山中新田宿跡（三島市1995）、港区上行寺跡・上行寺門前町屋遺跡の第250号遺構（港区2006）、取手市取手宿跡第16号土壌（茨城県教育財団2014）から同様の製品が出土している（第4図2～4）。

いずれも、オランダ・マーストリヒトで、1859年から1863年まで稼働していたギョーム・ランベルト社製の可能性が指摘されており（岡1995）、本製品も同様の可能性が窺える。散蓮華は、ヨーロッパでは使われぬ器種であり、アジア市場向けに作られた製品と推察される。

第6号土壌は、第4号土壌と重複し、下層の遺構である。一部は攪乱を受けている。酸化コバルト染付が普及する直前段階の土壌であり、瀬戸美濃系磁器陰刻文染付丸碗を最新とする。1860～1870年代頃と推定される。出土区画は、『絵図』では「髪結/庄助店/嘉吉」、『営業便覧』では『金床』である。

### （3）ヨーロッパの影響を受けた陶磁器

西洋陶磁器の輸入は、珍品を好む日本人の目には魅力的に映ったのであろう。

しかし、単なる物珍しさによるものだけではない。19世紀前葉には、京都や信楽、伊賀などでヨーロッパ産陶磁器の模倣を行うようになる。また、江戸時代末期には美濃や尾張で銅版転写染付を導入し始める。

このようにヨーロッパ製品が近世窯業に影響を

与えていくのである。

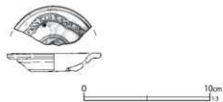
第5図は、栗橋宿本陣跡で出土した国産土瓶の落とし蓋である。出土位置は残念ながら押さえられず、第一面の表採資料として報告されている。

上面は白土化粧後に呉須で絵付けている。さらにバナナ状の罫いの中に青い土絵付で「ON [ S ] … F E L Y R E N N A A M .」とアルファベットが書いている。「M」と「O」の間にピリオドがついているため、「ON [ S ]」が文頭であろう。「ON」に続く文字は半損しているが、「S」の可能性が高い。

「… F E L Y R E N」の意味するところはわからなかったが、「N A A M」は「名」を意味する単語である。「ON [ S ]」は、1人称複数形的所有格もしくは目的格相当する単語であろう。オランダ語と推定される。

白土染付でアルファベットの絵付けを施すのは、所謂「阿蘭陀写し」の特徴である。本製品も同様に、白土染付且つ、アルファベットでオランダ語が書かれている。したがって、阿蘭陀写しの可能性が高いと言える。

京焼や伊賀焼等で阿蘭陀写しの製作が行われているが、本製品の具体的な産地は不明である。年代については、白土染付土瓶であることから19世紀中葉以降の可能性が想定される。また、土絵付であるため、製作地で阿蘭陀写しとして製作された可能性については、熟考する必要がある。



第5図 ヨーロッパの影響を受けた国産陶器

### 3 栗橋宿のヨーロッパ産陶磁器の受容

安政の五カ国修好通商条約によって、諸外国との貿易が活発になった1859年以降、さらに多くのヨーロッパ産陶磁器やガラス製品がもたらされた。その一方で、ヨーロッパの商人らが欲していた貿易商品の一つは、日本産の生糸・蚕種であった(註7)。

北武蔵地域における江戸時代の養蚕は、秩父・川越などの現在の埼玉県西部で行われていた。県東部地域ではほとんど確認されていないが、明治40年(1909)の埼玉県による養蚕調査では、現在の久喜市菖蒲町・白岡市の辺りに所在した大山村で天保元年(1830)に行われていたとされる(久喜市郷土資料館2012)。

栗橋宿が位置する埼玉県北東部地域では、明治初頭頃に生糸の生産が増加している。これは、明治6年(1873)に政府によって、日本の最大輸出品目である生糸の生産を向上させるために桑の栽培が奨励されたからである。

また、栗橋宿では古くから舟運による輸送が発達している。『栗橋町史』には『武蔵国郡村誌』を基に作成した船の一覧が記載され、明治初期の舟は610艘を数える。このうち、栗橋宿が所有していた舟運に関わる川船は、高瀬舟10艘、小高瀬舟2艘、似船8艘、屋形船17艘である。

農産物等を積んだ船は江戸へと向かい、そこで空となった船に上り荷を扱う問屋を廻り、塩や砂糖、瀬戸物等を積んで江戸川・利根川を遡行していったとされる(久喜市2015)。

以上のような栗橋周辺地域の歴史的環境をみると、幕末期から明治時代前半期にかけて、生糸や蚕種を載せた船が利根川を伝って江戸や横浜へ派遣されたことは想定される。これらの背景の中に、ヨーロッパ産陶磁器の受容要因の一つが位置付けられてくると現時点での考えを示しておきたい。

また、栗橋宿では、慶應3年(1867)7月1日夕方に、幕府の御雇外国人であるフランス人ル

イ・フィリックス・フロランとエミール・ド・モンゴルフィエ(註8)が栗橋河岸に着船し、関所前を通行している。これに際して、栗橋宿・古河宿の役人へ宛てて、人足や道案内、食糧の用意などが通達されていた(久喜市2015)。

ヨーロッパ産陶磁器が単純に彼らの食事に関わっているとは言いがたいが、このように幕末期には異国人が訪れることもあったようである。

さて、江戸市中では18世紀以前からヨーロッパ産陶磁器が少数流通しており、年代が上るにつれて緩やかにその数は増えている。ヨーロッパ産陶磁器の需要が高まるのは、江戸市中では19世紀第3四半期頃であり、19世紀第4四半期には急増することが確認されている(長佐古2018註9)。

ではここで、栗橋宿跡出土の製品を年代別にみてみよう。

栗橋宿で初出となるのはポッホ・フレール社製ウィロウ・パターンのリム皿(第2図1)、ギョーム・ランベルト社製の可能性がある散蓮華4個体(第3図8～11)で、全5点である。

リム皿の製作年代は1855～1860年で、散蓮華は1859～1863年である。遺構廃絶年代は1860年～1870年代頃である。

続いて1870年代頃の遺構は、第7地点第4号土壌出土の湯呑形碗(第3図4)、同第35・36土壌出土の鉢(第3図7)で、全2点である。

1880年代の遺構は、第6地点第6号溝跡出土の皿(第3図1)、第3地点第8号土壌出土の皿(第3図6)で、全2点である。

19世紀末の遺構は、栗橋宿本陣跡第7号井戸跡出土の皿、第3地点第4号土壌で、全2点である。

第445号土壌出土の碗については、2基の遺構に分けられることから、明らかに2時期が認められる。しかし、遺物は一括で取り上げられていることに加えて、混在が激しいため廃絶時期を最新期

である 20 世紀前葉とするほかにないことについては留意しておきたい。本遺構出土の碗の伝来については、19 世紀後半である可能性は高いと考えられる。

以上のように栗橋宿跡においては、19 世紀第 3 四半期頃に初出するという点では江戸市中とは異なるが、第 3～4 四半期にかけて出土量が増え、ピークに達することについてだけを見ると、江戸市中の傾向とおおむね同様であるといえる。

これについては、日本国内でみられるヨーロッパ産陶磁器の多くがオランダ産であることが関係しているように。

オランダ製プリントウェアの代表的な窯であるベトルス・レゲー社が日本市場への参入に本腰を入れるのは、イギリス製の最新印刷機器を導入した 1851 年以降であり、1859 年には 3 隻の商船を派遣している（長久 2011 註 10）。

また、日本国内でベトルス・レゲー社に匹敵する流通量としてドーソン社が挙げられる。ドーソン社は 1850 年代にイギリスから大陸への輸出に関税がかけられるようになったこと、当時産業革命によってイギリス国内の鉄道敷設が急速に広がったことで港湾都市という利点が活かせなくなったことが重なり、次第に衰退していくこととなる（註 11）。

このような状況の中で、岡泰正氏が言及しているように出島においては、ベトルス・レゲー社と競合してドーソン社製品が多量に荷揚げが確認されている。先述のとおり、ベトルス・レゲー社は幕末開港後に日本市場との取引を本格的に開始しており、同時に関税自主権のない日本市場がドーソン社の目に留まっていたことは予想される。1858 年の開港後に日本市場に目をつけ、廃業する 1864 年までの間に一時的に日本との貿易が活発になったとは想定されよう。

しかしながら、管見の限りではドーソン社との貿易史料は確認できておらず、日本においてドーソン社製品が多い理由については課題となる。

このように、19 世紀第 3 四半期以降のヨーロッパ産陶磁器の増加は、各国生産地の生産性の向上や貿易戦略が大きいかかわっていることが考えられる。

また、長佐古氏は出土地の空間属性についても言及しており、大名屋敷などの上位社会階層から旗本・御家人等の中・下級武士と町地等に住む中位以下の経済階層への需要の変化について指摘している（長佐古 2018）。

栗橋宿内においての出土位置をまとめると、旅籠屋（2 点）、鰻鮓屋（1 点）、髪結（6 点）、小売酒屋（1 点）、荒物屋（1 点）、名主・問屋（1 点）である。荒物屋や名主・問屋はそれぞれ旅籠屋が隣接し、髪結は鰻鮓屋が隣接している。

区画出土の皿（第 3 図 1）は、「舟問屋」と「餅菓子屋」の間だが、流通と関わる「舟問屋」の伝世品であろうか。また、日光道中出土の皿（第 2 図 2）は、両脇に「飯売旅籠屋」や「茶屋」が連なっている。

こうしてみると、飲食に関わる店、及び隣接地にある程度まとまる傾向にある点で興味深い。

栗橋宿は町屋であり、宿内での階層差を見出すことは難しいが、江戸市中と栗橋宿を比較すると、その需要の高まりは 19 世紀第 3 四半期におきた出来事が契機の一つとなっていることがみえてくるのではなかろうか。すなわち、安政 5 年（1858）に締結された安政五ヶ国修好通商条約である。

上記の条約締結により長崎・神戸・函館・新潟・横浜の五港が開港されている。横浜港には外国人居留地が形成され、商会が連なり、日本と諸外国との貿易窓口となった。

横浜の外国人居留地は、山下居留地遺跡（天野ほか 2010）として発掘調査されており、商館員が所有していたであろうヨーロッパ産陶磁器やガラス製品が多数出土している。

この外国人居留地での貿易によって、横浜港は最大の貿易港となり、生糸や茶葉などが輸出され



ていた。

江戸時代の日本は、長崎の出島で主にオランダ・清朝との貿易に限定されてきた。そのような情勢の中で、ヨーロッパ産陶磁器が流入し、さらに江戸へ運ばれた。輸送にはある程度コストがかかる。そのため、当初は江戸市中の大名屋敷など、経済的な上位者がヨーロッパ産陶磁器を手に入れることができたと考えられる。

その後、横浜港などが開港されると、横浜から直接、江戸をはじめとする関東地方一帯に流通させることができるようになったため、人口の多い中位以下の経済階層も安易に手に入れることができたのであろう。

そして、栗橋宿にもその波は波及し、旅籠屋や飲食系の店を中心に珍品の食器として需要が広がったと想定される。

## まとめにかえて

全国的に見れば、地方において幕末・明治期の遺跡調査数は少なく、調査されても様々な事情により報告書への反映がなかなか行われないのが現状である。また、報告者によっては近世以降の陶磁器類や貿易陶磁についての知識が不足し、ヨーロッパ産陶磁器が出土しているも見落とされていることもあるかもしれない。小破片・細片ならなおさらである。そのため、必然と地方での類例が少なく、現状では養蚕業とヨーロッパ産陶磁器の流通関係については、想定域を出なく、今後さらにつきつめていかなければならない。

また、19世紀第3四半期以降の日本国内におけるヨーロッパ産陶磁器の需要の高まりは、近代化に伴う洋食文化の受容との関わりもあれば、各国の貿易システムの事情と生産地における生産性・品質の向上、安政五ヶ国修好通商条約の締結による諸外国との貿易情勢変化と外国人居留地の建設

が契機と考えることもできる。さらに、明治6年(1873)の桑栽培奨励と諸外国との養蚕品貿易の関係性についても少なからず関りがあるのかもしれない。

このように、幕末・明治期の地方宿場町におけるヨーロッパ産陶磁器の受容は、様々な要因が重層的に関わっていると考えられる。また、藤沢宿出土製品のカタラーニ痕跡と外国人旅行者の関わり(西本2017)のように、地域性ということもある程度あるのだろう。

栗橋宿跡の調査報告書の作成もようやく折り返し地点である。現状では、栗橋宿におけるヨーロッパ産陶磁器の受容要因に対する明確な答えは出ない。

日本国内ではオランダ産が多くみられ、ベトルス・レー社で日本向け製品が生産されている(長久2011)ことから、オランダを通じてもたらされていることは予想される。しかし19世紀、とりわけ幕末開港期前後のヨーロッパ産陶磁器の流通状況は未だ明らかにはされていない。今後、地方におけるヨーロッパ産陶磁器の出土事例が増加すれば、流通経路と受容要因について迫ることができるだろう。

ヨーロッパ産陶磁器は、幕末期から明治時代にかけての出土が大多数である。自治体によっては、近代遺構を攪乱として処理されることもあるだろう。今後、攪乱としたものの中にヨーロッパ産陶磁器を見出すことができた場合、可能な限り攪乱の年代を示し、ヨーロッパ産陶磁器の出土事例が増えていくことを願うばかりである。

本稿を執筆するにあたって、東京大学埋蔵文化財調査室の堀内秀樹准教授に御助言を賜りました。また、巻頭図版に使用した写真は魚水環氏の手によるものである。末筆ながら両氏には感謝いたします。

- 註1 本稿では、栗橋間所番土屋敷跡、栗橋宿本陣跡も含めて、栗橋宿跡という一つの遺跡として扱う。  
また、栗橋宿本陣跡は、本来であれば店子を含む本陣跡と町屋で分けられるものであるが、調査等の都合上、町屋も含めた遺跡となっている。そのため、『栗橋宿本陣跡Ⅰ』では本陣跡の南に広がり第6地点と隣接する町屋、『栗橋宿本陣跡Ⅱ』では店子を含む本陣跡の敷地として報告している。
- 註2 岡泰正氏によると、プリントウェアという名称は日本では一般的ではなく、学術的名称としては、トランスファー・プリンティング・ウェアが正式名称とされている(岡2019)。
- 註3 銅版転写絵付けとは、銅版を印刷原盤とする印刷技法である。1752年にイギリス・リヴァプールの印刷業者が陶器の絵付けに利用したことが始まりとされる。  
日本では、幕末期に美濃の里泉焼や尾張の川名焼等、極一部地域で導入されたが、生産効率の悪さから短期間で途絶えている。  
その後、途絶期間を経て、明治22年(1889)に美濃多治見で銅版転写絵付けが完成し、特許が取得された。以後、大正年間まで各地で銅版転写染付磁器の量産が行われている(矢部他2002)。
- 註4 岡泰正氏による、RoberCopeland 著の『Blue and White Transfer-Printed Pottery』(Shire Publications Ltd, 1982)の訳出を引用した。
- 註5 ボッホ・フレール社が使用していた裏印は、『Les Faiences et les Porcelaines de Belgique』、『Les Faiences et les Porcelaines Belges et Luxembourgeoises』の2冊の書籍に掲載されていることをインターネット上で確認したが、原本は現地古書オンライン店舗でも現在販売されておらず、残念ながら入手は叶わなかった。また、第654号土城出土の製品は報告書では英国産として報告されている。
- 註6 マーストリヒト陶器の著名な研究者であるマリローズ・ボガーズ氏が著したMari-Rose Bogaers『Drukdecors Maastrichts aardewerk 1850-1900』(Uitgeversmaatschappij ANTIEK Lochim B.V., Lochem 1992)を参照している。
- 註7 当時、ヨーロッパでは微粒子病と呼ばれる蚤の病気が流行し、生糸の生産量が落ち込んでいた。そのため、日本産の蚕種や生糸がヨーロッパへ輸出されていた(久喜市郷土資料館2002)。
- 註8 フロランは明治2年(1869)に日本初の洋式灯台観音崎灯台建設に関わり、モンゴロフィエはフランス式簿記会計を伝えた人物である(久喜市2015)。
- 註9 長佐古氏が参照している貿易陶磁研究会による「近世都市江戸の貿易陶磁」に掲載されているヨーロッパ産陶磁器の集成は、推定廃棄年代を報告書掲載資料のみで判断している。そのため、オランダで明らかにされているパターンの年代と出土しているオランダ製資料との間には、齟齬が生じていると堀内秀樹氏より御教示があった。
- 註10 長久智子氏によってマリローズ・ボガーズ氏の論文Marie-Rose BOGAERS, "IK HAD DEN MOED...De Maastrichtse aardewerkfabrikant Petrus Regout en de export van zij zongenaamde 'Engels' aardewerk naar Japan" Antiek no.7, pp.327-343, Lochem, The Netherlands, 1992の一部が訳出されている。
- 註11 サンダーランドには16箇所の窯があり、19世紀中葉頃に最盛を迎えるが、19世紀後半から次第に衰えていった。ドーソン社は1864年に銅版転写に使用する銅版画を公売にかけており、実質的にはこの頃に廃業したと考えられる。

## 引用・参考文献

- 愛知県陶磁資料館 2011「阿蘭陀焼憧れのプリントウェア―海を渡ったヨーロッパ陶磁―」愛知県陶磁資料館
- 蘆田伊人 1963『新編武蔵風土記稿』第三巻 大日本地誌大系(二)
- 天野賢一・穴戸信悟・近野正幸 2010『山下居留地遺跡』かながわ考古学財団調査報告書 258
- 茨城県教育財団 2014『取手宿跡Ⅰ』茨城県教育財団文化財調査報告書 385
- 岡泰正 1995「三島市山中宿出土のヨーロッパ製転写染付陶器について」『山中城跡三ノ丸第1地点』三島市教育委員会
- 岡泰正 2001「第2節 出島・護岸石垣出土のヨーロッパ製陶器について」『国指定史跡 出島阿蘭陀商館跡 護岸石 垣復元事業に伴う発掘調査及び工事報告書』pp97 - 115 長崎市教育委員会
- 岡泰正 2002「第1節 出島・食卓の情景―平成9・10年度の発掘におけるヨーロッパ陶器・ガラス器をめぐって―」『国指定史跡 出島阿蘭陀商館跡 道路・カピタン別荘跡発掘調査報告書』pp151 - 185 長崎市教育委員会
- 岡泰正 2008「第1節 出島出土のヨーロッパ陶器をめぐって」『国指定史跡 出島阿蘭陀商館跡 カピタン部屋跡他西側建造物群発掘調査報告書』pp 1 - 41 長崎市教育委員会
- 岡泰正 2018「第1節 出島出土の西洋陶器について」『国指定史跡 出島阿蘭陀商館跡 銅蔵跡他中央部発掘調査報告書』pp52 - 75 長崎市教育委員会
- 岡泰正 2019「第1節 出島阿蘭陀商館跡 江戸町側出土の西洋陶器及びガラス器について」『出島阿蘭陀商館跡 出島表門橋架橋に伴う発掘調査報告書』pp59 - 71 長崎市教育委員会
- 片山裕介 2020『栗橋宿跡Ⅴ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 463 集
- 久喜市教育委員会 2015『久喜市栗橋町史 第一巻通史編 上』久喜市教育委員会
- 久喜市郷土資料館 2012『第二回企画展 蒔をつくる～久喜の養蚕～』久喜市郷土資料館
- 鈴木敏中ほか 1995『山中城跡三ノ丸第1地点』三島市教育委員会
- 長佐古真也 2018「江戸遺跡出土の西欧産陶磁製器に関する一考察―幕末～近代前期における西洋文化受容の様相―」『江戸遺跡研究会第31回大会 遺物にみる幕末・明治 発表要旨』pp115 - 141 江戸遺跡研究会
- 長久智子 2011「ペトルス・レーゲル社の日本向け輸出製品―19世紀オランダ・マーストリヒト陶器の側面―」『愛知県陶磁資料館研究紀要 16』愛知県陶磁資料館
- 西本正憲 2017「東海道藤沢宿遺跡出土のオランダ産銅版転写皿について」『藤沢市文化財調査報告書第52集』pp27-38 藤沢市教育委員会
- 日野市遺跡調査会 2003『南広間地遺跡』日野市教育委員会
- 水村雄功 2019『栗橋宿跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 456 集
- 港区教育委員会 盤古堂 2006『上行寺跡・上行寺門前町屋跡遺跡発掘調査報告書』長谷コーポレーション
- 村山卓 2019『栗橋宿本陣跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 451 集
- 村山卓 2020『栗橋宿本陣跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 460 集
- 矢部隆 2018『栗橋宿跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 448 集
- 矢部隆 2019『栗橋宿跡Ⅳ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 458 集
- 矢部良明他 2002『角川日本陶磁大辞典』角川書店
- 横浜市歴史博物館 2020『明治・大正のハマの街 新庁舎建設地・洲干島遺跡』公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団
- A.W.Coysh R.K.Henrywood 1982 "The Dictionary of Blue and White Printed Pottery 1780-1880"

- A.W.Coysh R.K.Henrywood 1989 "The Dictionary of Blue and White Printed Pottery 1780-1880 volume II"
- Henry E Kelly 2006 "The Glasgow Pottery of John And Matthew Perston Bell" Henry E Kelly
- John C. Baker 1984 "Sunderland Pottery" Thomas Reed Industrial Press Limited
- Michael Gibson 1999 "19TH CENTURY LUSTREWARE" Antique Collectors' Club Ltd

## 第1表 凡例

栗橋宿跡の報告書では、遺構の推定廃絶年代を可能な限り正確に把握するために、東京大学構内遺跡群の分類（東京大学埋蔵文化財調査室 1999・2011）に即して陶磁器類の分類を行っている。東大分類に当てはまらないものについては、東大分類に基づいて、栗橋宿で独自の分類を設定している（栗橋宿跡調査報告書参照）。また、表内の数値は底部破片数、破片数をカウントしている。以下に、本稿の分類表に掲載されている製品の凡例を示す。

- (1) 材質記号は、J（磁器）、T（陶器）、D（土器）である。
- (2) 産地記号は、A1（景徳鎮窯系）、A8（ヨーロッパ系）、B（肥前系）、C（瀬戸・美濃系）、D（京都・信楽系）、E（備前系）、F（志都呂系）、G（常滑系）、I（萬古系）、J（大塚相馬系）、K（丹波系）、L（堺・明石系）、M（益子・笠間系）、P（淡路系）、Z（生産地不明）である。
- (3) 器種番号は、1（碗）、2（皿・灯明皿）、3（大皿）、4（燗德利）、5（鉢）、6（坏）、7（猪口）、8（仏飯器）、9（香炉）、10（德利）、11（御神酒德利）、13（蓋物）、15（壺・甕類）、16（急須）、18（合子）、19（水滴）、20（蓮華）、21（植木鉢）、23（片口鉢）、27（水注）、29（搦鉢）、31（火鉢）、33（鍋）、34（土瓶）、35（戸車）、38（手培り）、40（油受皿）、41（油德利）、42（行平鍋）、43（十能）、44（乗燗）、46（カンテラ）、47（焙烙）48（燈紗）、51（焼塩壺）である。

近代磁器については東大分類では細分化を行うことができないため、日野市南広間地遺跡（日野市遺跡調査会 2003）の第111図「近・現代磁器碗の器形とその変遷」を基に分類を設定した。具体的には、変遷図における平碗・飯碗、丸腰湯呑碗、端反形環、長筒形環の分類を東大分類と複合せ、以下の設定を行った。

1. 平碗・飯碗は東大分類 JC1f を基に、「③平碗（扁方形）」を JC1f-a、「⑤飯碗（丸腰形・定形化）」を JC1f-b とした。
2. 丸腰湯呑碗は東大分類 JC6a を基に、「⑩ a・b/丸腰湯呑 a」を JC6a-a、「⑪丸腰湯呑 b」を JC6a-b、「⑫ a/丸腰湯呑 c」を JC6a-c とした。
3. 端反形環は東大分類 JC6f を基に、「⑦ a 端反形環」を JC6f-a、「⑦ b 端反形環」を JC6f-b、「⑨ a 端反形環」と「⑨ b 端反形環」を JC6f-c とした。
4. 筒形環は東大分類 JC6c を基に、「⑧ 長筒形環」を JC6c-a、「⑧' 長筒形環」を JC6c-b とした。

近代磁器のに使われる釉薬や染付原料、印刷技法については、各分類の最後にコバルト（酸化コバルト染付）、型紙（型紙摺絵染付）、銅版（銅版転写染付）、ゴム印版（ゴム印版染付）、クロム（酸化クロム青磁釉）、多彩（手描きの多色彩）等の語句を付した。その他に付した語句は、大碗（肥前系磁器碗の内、口径13cmを超えるもの）、角皿（幕末～明治初頭頃に多い肥前・瀬戸・美濃系磁器の輪高台型皿）、有耳壺（肩部の2～4か所に紐状把手が付く壺）である。

また、TZ10 トビガンナ・TZ10 長頸壺は、東北・北関東地方を中心に分布する地方窯系の頸部別造り大型德利（すず德利）、DZ31 台付は輪高台状の脚が付く在地産軟質瓦質火鉢、DZ47b 土師質は常陸地域で生産される金雲母が多量に含まれる土師質の内耳平底焙烙、DZ47b 瓦質は北武蔵・上野系の瓦質の内耳平底焙烙、DZ47 片手は体部に水平もしくは斜めに棒状把手が付く小型の土師質焙烙を指す。

第1表 出土陶磁器組成表

材質・産地記号	器種番号	細別記号	日光道中		本陣跡		本陣跡(町屋)		第6地点		第3地点		第7地点										
			道路跡11層		SE7		SK445		SK654		SD6		SK4		SK8		SK4		SK6		SK35/36		
			底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	
JA1	-	-														1	1						
JA8	-	-		1				1	1	1			1		1	1	1	1	4			1	
JB	1	-		44		1		2	1	1		4				1	2		1	1	3		
		a											1	1									
		b				2		1															
		d						1		1													
		e				1	1	1						2	1	3							
		f				1		3		3	5					8							
		f大碗							1	1						1							
		g		2		1	1	2		1					1	10	1	6					
		h														1							
		i		1		2	7														1	2	
		l		9		1	1			3	4			2		1							
		m					1	3			1												
		n		3			2	14	2	3	1	2					1				6	11	
		o		2					6	7	1	4			4	4	2	2				1	4
		p				1	1																
		q							1														
		r																		1	1		
		u				1	1							1	1								
		v		1	1	2	4		2					1	1	2	2						
		-		2	12					1	2				4		2	2	6				2
		a			1						1	1										1	1
		e									1	1											
		g			1	1	1				2	2				1	1	1	1	2	3		
		i		2	2			1	1	1	9			2	3	1	1	1	1	2	2		2
		l		4	6			3	5	3	3		2									7	9
		k						1															
		l																	2	7			
		m								1	1			1	1								
		o												1	1			1	1	7	8		
		p			1						1												
	q		3	4						1	1		1	1									
	3	角皿						1							1	2							
	b	-							2	2					1	1							
	4	-					1	2				1										1	
		コバルト									1												
	5	-		3	2	2	1	2								1						3	
	a		1	1																			
	b														1	1					1	1	
	c																					1	
	d						1	1	2	2				2									
	e		1	2			2	2	1	1		2		1	2				5			1	
	6	-		2																			
	a						1	1	2	2	1	1		1	4			3	3			2	
	b				1	1				1	1				1	1							
	c		1	1				1	1													1	
	e		1	2																			
		fbコバルト				1	1																
	7	-									2												
	a		1	4			1	2						1	2	1	1	2	4	4	4	4	

材質・産地記号	器種番号	細別記号	日光道中		本陣跡		本陣跡(町屋)		第6地点		第3地点		第7地点										
			道路跡11層		SE7		SK445		SK654		SD6		SK4		SK8		SK4		SK6		SK35/36		
			底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	
JB	7	b		1																1	12		
	8	-						1													1	1	
	9	c																				1	
	10	a		1				2	2	2		1		1		2					1	14	
	11	b		2	2	2		1				2		1	1		3					1	
		-		1								2										1	
	13	a													1	1					1	4	
		c							1	1					3	5	1	1				4	6
	16	-						3			1	1											
	18	b																1	1				
	19	-												1									
	20	-							1	1													
	35	-									1	1											
	0	-		1	2									1	1							1	1
		a		3			1	3	2	2				2	4		1					2	2
b			1	3																		2	2
c			1					2		2	3	3		2	2			1	1				
f			1							1	1											3	
m								1															
-				17							1	8			2		1						
1	a							1	5		1	1	1		2	1	1			1			
	a色絵																						
	a型紙				1	1	1					1	5	6	13				1	1			
	aコバルト											2	2	2	4								
	b					9	15																
	d			18		6	24	5	15	1	8				1	3	2	3	14	21	5	6	
	dコバルト				1										1								
	e		1	5			4	11	3	9	2	9			4	2	2	7	34	1	8		
	f			1				5															
	f型紙					1	1														1	1	1
	f近代				1	1	1	1													2		
	fコバルト				1	3	1	1					2	2	1	1					2	1	1
	f多彩																						
	f銅版																			1	1		
	fa														5	5					1	1	
	コバルト											1											
	多彩																				1	1	
2	銅版										1												
	-								1	4				2		1		3					
	a									1											6	11	
	b								3		1	1	1				1	1	9	9			
	b近代				2	2																	
	bコバルト				1	1																	
	d							1	3		2					1	1	3	5	7	8		
	e		1	3			1	2	1	1					1	1							
	角皿			1																			
	型紙												1	1		1						1	
	近代							1														1	
クロム										1				1	1								
コバルト											1	2	2	2		1							
銅版																	1						
洋皿																			1	1			

材質・産地記号	器種番号	細別記号	日光道中		本陣跡		本陣跡(町屋)		第6地点		第3地点		第7地点													
			道路跡11層		SE7		SK445		SK654		SD6		SK4		SK8		SK4		SK6		SK35/36					
			底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片				
JC	4		3			1				12			3	15	11	36	5	35			1	2				
		コバルト 銅版										1	1	1	2			4	1	4			1	2		
5	-		1	1														1	1							
		型紙					1																			
		近代			2	2																				
		クロム																					1	1		
		コバルト					1	1							1									1	1	
		三田系 銅版																						1	1	
6	-																						1			
		a	1	2					9	11	3	4	1	1	1	3	1	1						3	4	
		aa コバルト					1	1																		
		ab					1	2															1	1		
		ab 銅版					1	1									1	1								
		ac 色絵				1																				
		ac コバルト			1	1																				
		a 色絵																						1		
		a 近代						1																		
		a クロム鏡										2	2													
		a コバルト							3						3	6										
		a 銅版						1																		
		a 福平環																					1	1		
		b							3	3	1	2			1	1							1	1	1	
		b ゴム印版			1	1																				
		b 凸帯					1	1																		
		b 吹絵					1	1																		
		c										1														
		c 近代																						1		
		cb 銅版																						1	1	
		cb									1	1														
		cc					1	1																	1	
		d		5		1	5	10	7	13	3	13			1	1	3	4	16	25	2	2				
		e															1	1							1	
		f						1					2	3	2	6								2		
		fa クロム						4																		
		fa コバルト						1	7																	
		fa 銅版																						1	1	
		fb コバルト									1	1													3	3
		fb 銅版																								
		fc クロム													3	3										
		fc 銅版									1	1						1								
		f コバルト													7	9										
f 多彩																						1				
g			1									1	1	3												
クロム													1	3												
コバルト											2	2										1	1			
銅版																	1									
8	-																1	3	4							
		コバルト																					1	1		
9	-												1	3												
		コバルト																								
11	b			1	1			1	1													1	3	1		
		コバルト																					1	1		

材質・産地記号	器種番号	細別記号	日光道中		本陣跡				本陣跡(町屋)				第6地点		第3地点				第7地点			
			道路跡11層		SE7		SK445		SK654		SD6		SK4		SK8		SK4		SK6		SK35/36	
			底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片
JC	13	-																				
		型紙					1	2														
		コバルト						2						1	4				1			
		崩版						1	2						1	3						
	16	-						3				1	2	1	3	6	23			1	1	
		クロム																				1
		クロム補込																				1
		コバルト						1						4		5			1		1	1
	19	崩版																				1
		-											2									
		20		1	1			1	1							2	2	2	2	2	2	5
		-							1			1	1									
		21										1										
		31											1									
		34																				1
		コバルト							1	3									1		1	
		- 母子																		1		2
		- 近代																				1
		- クロム																				1
		- コバルト																				5
- 栓																			1	1		
- ティーカップ						1	1													1		
- 崩版																				1		
-																						
-																				2		
JP	2											1	1									
TAB	-					1	1					1	1									
TB	1	a				1	1															
	2	a				1	1															
TC	1	-																				
		a																				
		ae						1	3													
		b						1	1													
		g																				
		l																				
		m																				
		r																				
		u																				
		v																				
	2	-																				
		b																				
		c																				
		e																				
		f																				
		h																				
		i																				
		k																				
		m																				
		o																				
4	-																					
	c																					
5	f																					
	i																					
	l																					



材質・産地記号	器種番号	細別記号	日光道中		本陣跡		本陣跡(町屋)		第6地点		第3地点		第7地点												
			道路跡11層		SE7		SK445		SK654		SD6		SK4		SK8		SK4		SK6		SK35/36				
			底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片			
TC	6	-		3		1	1	2	1	1										1	1	2	2		
	8	-																				1	1		
	9	a		1																	1				
		d				1																			
		g																					1	1	
	10	-									1														
		a												1							1	1			
		c							1																
		d							3																
		e								1	1	3			3		1				7			2	
		f																				1			
		g		1				3	1	5				1	3						2			1	
	15	a		1							2										1	1	4		
		b		1							1			1	3		5			3	1	7			
		c					1	1																	
			有耳壺																			1			
	19	-													1										
	21	-				1		2							2		1		1						
	23	b		1				3										1	1		1	2	1	1	
		c																					1		
	27	a									1														
	29	-																					2		
	34	-																				1			
	40	-																				2			
		c		1	4					2	2				1	3	1	2	2	5	1	1		1	
		e								1	1														
	41	-							1	1															
44	-																								
00	b		1																						
-	-		1	4						5															
TD	1	d					2	3						1	1					2	2				
		g		2																					
		h									1									2					
		i																				1	1		
	2	b		1	3					2	2								1	2	2	1	1		
	4	-		1	1			1	3	2	7	2	14		1	5	1	8			1				
	6	-		2											1	4	2	3				1			
	9	-		1	1						1	1													
	19	c																			1	1			
		-																			1	1		2	
	23	b						3																	
	27	b																			1				
		d															1	1					1	2	
	34	-		3						2															
	40	a		1						1	1													2	2
		b							1	1															
	44	a															1	1		7	11				
46	-																								
48	-																			1					
-	-				1		1																		
TE	10	-																			1				
TF	10	-			1					1	1														

材質・産地記号	器種番号	細別記号	日光道中		本陣跡		本陣跡(町屋)		第6地点		第3地点		第7地点									
			道路跡11層		SE7		SK445		SK654		SD6		SK4		SK8		SK4		SK6		SK35/36	
			底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片	底部	破片
TF	2	-				1	1															
TG	15	-	1	2					1		2			1	2				2	2	2	
TI	16	-					1				9	14			2		2					
	00	-										1	2	2								
TJ	1	-																1	1			
	6	-														1	1					
TK	29	-				1	1			1						1	1	4				
TL	29	-	1	4	2	3	1	3		1	3		1	2			1	4	1	1		
	21	-						3														
TM	29	-				1				1	1		1	1							1	
	29	益子系								1												
	1	-								1						1						
	2	硬質陶器			1	1							1					1				
	4	-		1												3	1	13	1	6		
	5	-						5		3			3	4			2			1	4	
	6	-															1	1				
	9	-								2												
	10	トビガンナ長頸壺				1				2		1	1	3	1	2		1		7		
	15	-				2					1	1	1	1	1		1		1	2	4	
	16	-	1	1				3	4		1	1	1	2	6							
TZ	21	-					4			1	3				1	2	2	1	4			
	29	-									1	1										
	33	a				1	6	14		2	5			2	7	3	7	5	10	1	1	
		-												1	1						1	
		-				1			1	1	1	12		1				2	3			
	34	a		4			2	10				4										
		b								2	4											
		c		1				1			2	15				1	2	1	2			1
		d										1									1	
		e						1	1	2									1	2		
		g		3				2	1	5	1	10	1	5		5	2	11	5	9	1	1
		i							1	1												
		k													1							
		l							1	6												
		s								1												
TZ	42	a														3				2	2	
		b													1				2			
		c					2			2	1	4	1	1	1	1		2		2		
00	a	-							2	2						3						
		b					1	2	2													
		c		1						1	2	1	1				1	1	1	1		
		d									2	2							1	1	2	2
		e								1	1										1	
		g									1								2	2		
		i																	1	1		
		j													2							
		l								1	2	2	2	3	1	2	2	5				
		s		1				2	1	1	1	1							1	1		
-	土管																		1		1	



**研究紀要** 第35号

—設立40周年記念号—

2021

令和3年3月10日 印刷

令和3年3月18日 発行

発行 公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台4丁目4番地1

<https://www.saimaibun.or.jp>

電話 0493-39-3955

印刷 朝日印刷工業株式会社